

北九州市立
文学館

友の会会報

第3号

平成28年7月

「こんな自主事業を」「意見を」 二十八年度総会開会

北九州市立文学館友の会は六月二十一日、平成二十八年度総会を市立文学館交流ステージで開きました。会員三千人が参加し、二十七年事業報告、決算と二十八年度事業計画、予算を承認しました。

冒頭、後藤みな子会長は「文学館を支え、共に進むにはどうしたらよいかというのを一年間、宿題にしてきたが、自主活動がまだ十分できていないことに忸怩たる思いがあります」とあいさつ。「こんな企画をやってほしい」とご意見をぜひお寄せください」と会員へのお願いを述べました。

二十七年度は文学館活動支援事業として、文学館が主催する特別企画展でのグッズ販売委託や朗読会、文学講座を開催し、企画展の魅力向上や恒常的な入場者の確保など文学館事業を側面的に支援しました。

支援した特別企画展は「夏目漱石―漱石山房の日々―」「ピーターラビットのおはなし」ピアトリクス・ポターの世界―」の両展です。関連グッズ販売による委託販売手数料として約六十七万五千円の収入を得たものの、販売員の人件費などの支出により全体収支は約四万円のマイナスとなりました。

◆平成28年度 友の会予算

(平成28年4月1日～平成29年3月31日)

(収入の部)

項目	予算額(円)	備考
会費	400,000	2,000円×200人
特別企画展収入	500,000	グッズ受託販売手数料収入等
自主・共催事業収入	162,000	文学館セミナー受講料 3,000円×54人 (前期27人、後期27人)
雑入	110	預金利息
前年度繰越金	339,257	
合計	1,401,367	

(支出の部)

項目	予算額(円)	備考
入館料	180,000	会員券(400円×200人) 企画展招待券(500円×200人)
特別企画展 関連経費	500,000	グッズ受託販売 人材派遣・搬送料等
自主・共催事業 関連経費	180,000	文学館セミナー(前期・後期 各1コース)講師謝礼等
会議費	10,000	役員会用お茶代等
印刷費	80,000	友の会会報印刷等
郵送料	200,000	切手、往復ハガキ、 郵便メール等
消耗品費等	50,000	消耗品等購入
予備費	201,367	
合計	1,401,367	

(収入の部)1,401,367円 - (支出の部)1,401,367円=0円



朗読会は劇団青春座の井生走己代表と劇団員のご協力で計三回にわたり、また文学講座は文学館セミナーとして、くずし字とドイツ語詩の二講座を開催。朗読者や講師への謝礼として約十二万円を支出しました。

二十八年度も引き続き二百人を目標に会員を募るとともに、関連グッズ販売、自主事業開催に取り組み、文学館来訪者の増加と友の会の収入確保に努めていきます。



北九州弁の面白さ紹介 学芸員・小野さんが講演

総会終了後、文学館学芸員の小野恵さんが「北九州ゆかりの現代作家について」と題して講演。昨春秋の特別企画展「アングク真前線―北九州発―」で紹介した地元ゆかりの作家の作品から、北九州の言葉を取り入れたものを取り上げました。

八幡西区出身の加納朋子さん『ぐるぐる猿と歌う鳥』(二〇〇七年)は、北九州に移り住んできた小学生の男の子が、北九州弁に戸惑いながら、言葉の壁を乗り越えて自分の居場所を探していく物語。同じく八幡西区出身、まはら三桃さん『たまごを持つように』(二〇〇九年)は、まはらさんが自身のターニングポイントになったと回想する作品。取材で悩んでいたときに耳に響いて来た北九州弁

で書くことを思いつき、対象に近づこうとできたといえます。

「北九州は九州の表玄関やけえ、ほとんど標準語と変わらんちや」(加納さん)、「こらきさん、なんしよんかつちや、でちよつと、あなた、何をしていますのですか、という敬語つち」(まはらさん)といった、二つの作品に登場する生き生きとした北九州弁が会場の笑いを誘いました。

小倉北区出身の福澤徹三さんが企画展図録に寄せた「方言とは文化である。地元という言葉が影をひそめるのはその地に受け継がれた伝統を失うのに等しい」という言葉も紹介。小野さんは「地元の個人的な作家の作品を多くの人に読んでほしい。文学館もそのための取り組みを続けたい」と結びました。



宮西達也ワンダーランド展
 ヘンテコリンな絵本の仲間たち
 第22回 特別企画展 子音
 2016.7.23(土)~9.19(月・祝)



次後20年 司馬遼太郎展
 一世紀「未来の街角」で
 第23回特別企画展 子音
 平成28年 10月22日(土)~12月4日(日)



文学館「特別企画展」について

今年度の「特別企画展」は、「宮西達也ワンダーランド展 ヘンテコリンな絵本の仲間たち〔七月二十三日〜九月十九日〕と「没後二十年 司馬遼太郎展 二十一世紀「未来の街角」で〔十月二十二日〜十二月四日〕」が予定されています。

宮西達也さんは『おまえうまそうだな』などの「ティラノサウルスシリーズ」、「おとうさんはウルトラマンシリーズ」など、子どもたちに大人気の絵本を出版されている作家で、『にゃー』は小学校の国語の教科書にも採用されています。本展では、優しさ、思いやりにあふれた宮西作品の魅力とメッセージ、絵本の楽しさを感じていただけるのではないのでしょうか。

今年で没後二十年を迎えた司馬遼太郎さんは『竜馬がゆく』『坂の上の雲』『燃えよ剣』『国盗り物語』など数多くの歴史小説、「街道をゆく」「この国のかたち』『風塵抄』などの紀行、エッセイといった多くの作品を遺しました。「日本とは、日本人とは」を主題に書き続けた司馬さんの作品を通じて、あらためて現代日本について考える機会となる展覧会となるでしょう。

「友の会」では、これまでと同じく、企画展の開催に合わせて、図録やグッズの販売を行う予定であり、この企画展が来館者にとって魅力あるものとなるよう、支援していきたいと考えています。

映画と文学

北九州市立文学館と小倉昭和館のコラボ

北九州市立文学館第二一回特別企画展「ブンガク最前線」に協賛して、小倉昭和館では北九州ゆかりの作家映画特集を行いました。(二〇一五年十二月五日〜十二月十八日)

第一週目には、村田喜代子原作映画二本立てとして、江戸時代の捨てて風習の物語『藤野行』(監督 恩地日出夫、主演・市原悦子)と芥川賞受賞作『鍋の中』原作「八月の狂詩曲」(監督 黒澤明、主演・村瀬幸子)を上映し、村田喜代子さんに「来館頂きお話を伺いました。原作の映像化は監督によって大きく違うという話に館内は大いに盛り上がりました。第二週目はタナダユキ&松尾スズキ脚本・監督映画二本立て、タナダユキさん七年ぶりとなる待望のオリジナル作品『ロマンス』(監督・いがらしみきおの原作漫画の映画化『ジヌよさらば』(監督・松尾スズキ、主演・松田龍平)を上映しました。

この特集に先立ち、リリー・フランキーさんが文学館に『東京タワー』オカンとボクと、時々、オトン』自筆原稿を寄贈されることを記念して、十月二十四日、当館のオールナイトイベントのオープニングゲストとしてリリーさんをお迎えし、映画の上映を行いました。文学、映画など多岐にわたる話題で予定時間を大幅に超えてお聞かせ頂き、お客様に喜んで頂きました。次回コラボもご期待下さい。(小倉昭和館館主 樋口智巳)



おすすめの本

『林 芙美子短編集』

北九州市立文学館文庫
 平成十九年十一月発行

この短編集には「蒼鷺を見たり(抄)」「風琴と魚の町」「清貧の書」「晩菊」他六編が収録されている。著者晩年の二つの作品について私の読後感を記してみたい。

「水仙」昭和二十四年二月発表。戦後の東京で暮らす四十三歳の主人公と二十二歳の貞子の生活には何一つ希望はない。夫は失踪。極貧の中で親子のいらだちは強まり、貞子は職を求めて北海道へ。その師走の夜、彼女はキャラメル一袋と小さな醤油入れを盗み、ポケットでその所有感を確かめる。折しも新聞の電光ニュースは議会解散を伝えている。彼女はこの激しい街のどこかで息を引きとる自分も連想してみる。――深い虚無感が暗い夜空に映し出されていくようだ、私は切なくなつた。

「下町」昭和二十四年四月発表。東京の下町で親戚に身を寄せ、静岡茶の行商をする三十歳の主人公は八歳の息子連れを運んでいる。夫はシベリアに抑留されて六年が経つ。行商で知り合った一つ年下の朴訥な男は、子どもにもやさしい。彼が二年でシベリアから帰還した時、妻は別の男のもとへ去つてた。二人は「長い間の閉じこめられた人間の孤独が、笛のようにひゅうと鳴る」中で親しい仲になる。が、突然のトラック運転中の男の転落死。けれども、行商を続け寂しさを紛らしている彼女に、ある日、路地の貧しげな家の女から思いがけず静岡茶への反応があった。「自分と同じような女達がせつせと足袋の底を縫っている。時々針が光つた」と結ばれている。――関係性が開かれていく兆しが感じられ、私は安堵した。

二作品の連奏低音は深い喪失感。著者は外界の状況と登場人物の心の情景を緻密に描写することで、読者の共感をぐいぐいと呼び起こしていく。

巻末に掲載されている今川英子文学館長作成の年譜は著者の作品理解にとっても役立つ。

一昨年、北九州市は林芙美子文学賞を創設した。今回の短編集をおすすめしたい。

(三村保子)

◆平成27年度 友の会決算報告

〔平成27年4月1日～平成28年3月31日〕

(収入の部)

項目	決算額(円)	備考
会費	372,000	2,000円×186人
特別企画展収入	675,080	夏目漱石展、ピーターラビット展のグッズ販手数料収入など
自主・共催事業収入	84,000	文学館セミナーの参加料(3,000円×28人)
雑入	217	預金利息
前年度繰越金	439,222	
合計	1,570,519	

(支出の部)

項目	決算額(円)	備考
入館料	87,000	会員券(400円×185人)74,000円、企画展招待券(26枚)13,000円
特別企画展関連経費	715,837	グッズ販売業務委託料等
自主・共催事業関連経費	208,648	自主・共催事業等の講師料・謝礼等
会議費	10,464	役員会用お茶代
印刷費	27,000	友の会「会報」印刷代
郵送料	176,579	切手、往復ハガキ、郵便メール便等
消耗品費等	5,734	色上質紙、領収証購入
合計	1,231,262	

(収入の部)1,570,519円 - (支出の部)1,231,262円 = 339,257円〔次年度繰越額〕

リレーエッセイ

仲間是一个の家族花錠

「色鳥・圭幸」 石川 一歩

私は石田波郷系の清水基吉の門下として俳句を学び、日本俳人協会会員として活動の拠点に鎌倉にあった。さて、平成十三年四月のことであつたと思うが、北九州電々同友会のお世話をされているAさんから、俳句の同好会を立ち上げようと思つているので、俳句作りについての講演をお願いしたい旨の要請を受けた。

私は北九州の俳句の普及に少しでもお役にたつのであればということ、その話を有難くお受けすることにした。数日してN.T.T.の一室に於いて、「楽しい俳句作り」と題して約一時間ほど講話をさせて頂いたが、俳句は色々な鳥達の囀りのようなものゝ結んだ。

七夕の七月七日を験の良日として十五人ほどが集まつて初句会が開かれた。三句投句をルールにしたが、川柳のような惚けた句や、三句合わせてようやく意味が

わかる作品が出たりして大賑いであつた。「色鳥」が俳句雑誌として産言をあげたのが平成十四年の一月。当時は一人の作品をページに掲載する贅沢なものであつた。

作品の整理・添削・批評・校正、ワープロによる文字の入力、「色鳥」の袋綴り製本の共同作業が夫婦で数年間続いた。家内が愚痴一つ溢さず従つて来てくれたのが「色鳥」存続の大きな原動力であつたように思う。

「色鳥」のメンバーの中には、N.T.T.会員の他に私の同窓生や俳句で知り合った人の友情参加もあつて会員は六十数名となつている。「人の和と輪を大切に」皆で決めた訓誨だが、色鳥精神として生かされ、和気藹藹の中でこれまで続けることができたように思う。

投句締切り二十日、作品が製本されてその月が若しくは翌月の頭に作者の手に届く。

この厳しい条件下にあつて、今年の十二月で満十五年を迎える。俳句雑誌を発行するのは容易な事ではないが、この仕事を止めようと思つたことは一度もない。

会員投稿

京町住居跡碑、終のすみかに

北九州森鷗外記念会会長 濱田源一郎

森鷗外が二度目の妻、茂子夫人と新婚生活を送つた京町住居跡碑の移転除幕式が三月二十六日にあつた。碑は昭和五十二年十月に小倉駅前ロータリーに建てられたが、再開築のあおりなどを受けて五度目の引越つてである。

鷗外は明治三十二年六月、第十二師団軍医部長として小倉に着任。三十五年三月に離任するまで、最初の一年五カ月は鍛冶町に住み、その後、京町に移転した。「二人の友」にその事情を「年の暮に鍛冶町の家主が急に家賃を上げたので、私は京町へ引越した」と書いている。

この京町の家で鷗外は、アンデルセンの「即興詩人」の名訳を完成させ、短編小説「独身」の舞台ともなつた。だが小倉駅の現在地への移転に伴い家は取り壊され、跡をしのぶものは昭和二十七年に小倉郷土会などが建てた小さな碑だけだつたという。

これを見かねた元小倉駅長の植田義幸氏が、劉春吉らに相談。浄財を募つて、山口県徳山産の御影石に、スエーデン産のグリーンレッドと呼ばれる赤御影石をはめ込んだ碑を完成させた。「森鷗外京町住居跡碑」の文字は、鷗外に直接治療してもらつたという元小倉市長の浜田良祐氏が、碑文は春吉が受け持った。

碑文には「京町の家は、この碑の南二十五分の場所にあつた」と記されているが、それは建立当時のこと。北九州森鷗外記念会前会長の出口隆氏の調査によると、今度の移転場所は住居敷地内にあつたという。ここを終のすみかにしてほしいものだ。



